９．清正が将軍就任を夢見た娘婿徳川頼宜

（１）「昭君之間」の将軍とは徳川頼宜のこと

熊本城本丸御殿にある「昭君之間」は、1610 年頃加藤清正が完成させた格式の高い謁見の間です。通常清正は、その前室に当たる若松の間で謁見していたと言われており、「昭君之間」は何のために造られたか謎となっています。清正は翌年（1611 年）の 6 月 24 日に亡くなっていますから、この部屋の本来の使い方をできずに亡くなったと思われます。

清正がこの部屋を作った意図について、その後の伝承では「豊臣秀頼が徳川幕府により大坂城を追われたとき、ここに匿い、西日本の豊臣恩顧の大名を糾合して戦うため」であったと言われています。しかし、これは、加藤清正＝豊臣恩顧の大名という固定観念から導き出された伝承であり、事実と違うと思われます。

清正は、秀吉に育てられ、若くして（26 歳）肥後半国の大名に抜擢されたことから、秀吉に恩義を感じていたのは間違いありません。しかし、秀吉の死後は、次の天下人は徳川家康と見定め、家康との関係を強めています。先ず秀吉の死により朝鮮から引き揚げてきた翌年の 1599 年には、家康の養女かな姫（生母於大の弟刈谷城主水野重忠の娘）を継室としています。その後 1606 年には、長女あま姫を徳川四天王の 1 人舘林藩主榊原康政の嫡男康勝に嫁がせています。そして、慶長 14 年（1609 年）9 月には、家康十男徳川頼宜と清正次女八十姫の婚約が決まっています。その結納使が熊本城を訪れた翌年の 1610 年に「昭君之間」は完成しているのです。これらの事実を見ると、秀吉死後、清正は徳川家の有力な姻戚大名となっていることが分かりますし、「昭君之間」は、八十姫と頼宜の婚約の儀式に間に合わせて造ったと考えられます。

秀頼を匿うために造られたという伝承説では、「昭君」とは将軍のことであり、秀頼のことであると説明されています。しかし、豊臣家は関白家であり、秀頼が将来就任するのは関白であり、将軍ではありません。将軍は源氏出身者でなければ就任できなかったため、秀吉は豊臣家を創設し関白家に加えてもらい、関白として執政する道を選びました。また、当時西日本の大名で大坂城に伺候する者は清正以外になく、もう豊臣恩顧の大名は存在しませんでした。従って、この説は無理があります。

「昭君之間」の「昭君」が将軍を意味するのは間違いないのですが、清正が将軍に擬したのは、秀頼ではなく、娘婿徳川頼宜であったと思われます。

（２）頼宜―家康の秘蔵っ子

頼宜は、1602 年生まれで、婚約当時 7 歳（八十姫 8 歳）で、水戸藩主でした。頼宜は、生まれてから家康が死ぬまで駿府の家康の元で育てられています。家康の子供の中で最も家康が手塩にかけて育てた子供です。徳川実記などには、家康は頼宜を可愛がり、厳しく育てたことが書かれています。頼宜がまだ小さい頃、家康と共に馬で川を渡っている際、頼宜が落水しても家康は助けなかったと言います。また、頼宜が 1614 年の大坂冬の陣で初めて出陣した際には、家康自ら武具を着せています。翌年の夏の陣では、頼宜は先攻を務めたいと

申し出ますが、家康に却下され、悔しさのあまり泣き出します。世話役の家臣が「殿はまだお若いから機会は何度でもありましょう」と慰めたところ、「14 のこの時が二度とあるか」と答え、これを聞いた家康は「今の言葉こそ鑓ぞ」と褒めたと言います。
このように家康から見て、頼宜は見所がある息子だったようです。
（３）頼宜と八十姫の婚約の意図
家康がこの頼宜の嫁に清正の次女八十姫を所望したのは、2 つの理由があると思われます。１つは、八十姫が清正と家康の養女で清正継室となったかな姫の間に生まれた娘であったことです。かな姫は家康の生母於大の弟の娘ですから、八十姫も家康の血縁者となります。2 つ目は、家康も高齢（68 歳）となり、豊臣家の問題を片づけておきたかったからです。家康としては、時間をかければ豊臣家も徳川幕府に臣従するものと考えて来ましたが、未だ成就していませんでした。徳川幕府成立後、殆どの旧豊臣恩顧の大名が大坂城に伺候しなくなった中で、清正だけは、江戸への行き帰りに伺候し続けていため、豊臣方にも信頼されていました。そこで家康は、清正に豊臣方説得を期待したものと思われます。この家康の期待に応え清正は、慶長 16 年（1611 年）3 月の二条城会見を実現させます。そして次はいよいよ・・と家康の期待が膨らんだ同年 6 月、あろうことか清正は突然死去します。
こうなると、豊臣方を説得できる人物は見当たらず、家康は豊臣討伐へと舵を切ります。
清正次女八十姫と頼宜との婚約が清正による豊臣説得が目的であった以上、清正が死去したら、その意味がなくなります。その結果、八十姫と頼宜の婚約は、解消が検討されたと思われます。1608 年に家康九男義直との婚約が決まっていた浅野幸長の娘（春姫）は、1614 年に嫁ぎますが、八十姫が嫁いだのは家康死去後の 1617 年でした。
（４）将軍就任の可能性があった頼宜
八十姫が婚約した頼宜は、第 2 代将軍秀忠の次の将軍になってもおかしくない状況にありました。当時秀忠の長子家光は頼宜より 2 歳下（1604 年生）でしたが、秀忠と正室お江は家光を嫌い、次男忠長（1606 年生）を溺愛していました。これを見た江戸城内の家臣は、次の将軍は忠長と見なしていたと言います。当時の徳川幕府では、将軍の就任について長子相続の決まりはなく、家康の指名で決まりました。将軍候補としては、秀忠の嫡男家光、忠長、家康の九男尾張藩主義直（1601 年生）、十男駿府藩主頼宜(1602 年生。八十姫と婚約した年の 12 月、家康は駿府藩 50 万石を立藩し、頼宜を藩主とした。)、十一男水戸藩主頼房（1603 年生）が考えられました。この中で、家康の評価は十男頼宜が最も高かったと考えられます。清正もそれを感じ取り、頼宜は次の将軍になる男と考えたようです。
（５）松平忠輝事件から始まった頼宜外し
このような状況が変わったのは、大坂の役後の 1615 年です。家康六男で越後高田藩主松平忠輝が正室に仙台藩主伊達政宗の娘五郎八（いろは）姫を迎えていたことから、忠輝は天下取りの野望を失っていない伊達政宗の影響を受け、幕府にとって将来危険な存在になる可能性が生まれていました。そこで家康は、この危険を除くため、忠輝を勘当（実質改易）します。そして、江戸城内で問題になっていた家光と忠長の将軍承継問題については、長子相

続をもって徳川幕府の方針と決めます。これで頼宜の次の将軍就任の可能性は潰えました。家康死（1616 年）後、秀忠は、次の将軍が家光として、家光に万一のことがあった場合には、次男忠長が将軍に就任する道筋を引こうとします。そのため 1619 年、頼宜を駿河藩主から紀州藩主に転封し、駿河藩主には忠長を据えます。家康とゆかりの深い駿府藩主の座に頼宜がいては、家光に何かあった場合、次は頼宜となる可能性を心配したためと思われます。また、将来幕府かく乱要因になる可能性があるとして家康が六男忠輝を排除したことから、家光や忠長にとってライバルとなりかねない 3 人の弟（義直、頼宜、頼房）の再配置を考えてのことと思われます。頼宜が転封となった紀州藩の前藩主は浅野家であり、前藩主幸長の娘を尾張藩主義直に嫁がせていました。この両藩は地理的にも近く、結託されることを防ぐため、浅野家を広島藩主として遠ざけたものと思われます。そしてそこに頼宜を入れたのです。紀州藩は家康とは縁もゆかりもなく、また国人乱立の難治の国であり、徳川御三家を入れるような場所ではありません。3 人の弟の中で家康の覚えが最もよく、人物的にも剛毅な性格であった頼宜を紀州に封じ込めるのが真の狙いだったと思われます。

秀忠は、1625 年将軍職を家光に譲り、大御所に就任し、実質院政を敷きます。こういう中で駿府藩主となった忠長の粗暴な行いが目立ち始めます。そこで秀忠は、1631 年、忠長を甲府蟄居処分とし、勘当します。忠長は、秀忠死後 1632 年に、将軍家光により改易の上高崎藩預かり処分となり、1634 年自害します。こうなると空いた駿府藩に頼宜が戻ることも考えられますが、頼宜の影響力を削ぎたい将軍家光（というよりもり側近連中）は、空いた駿府藩を幕府直轄とします。当時家光将軍体制で実質的に政策を決定していたのは、秀忠将軍体制から引き続き老中を務める酒井忠世、酒井忠勝、土井利勝、松平信綱であり、彼らは家光将軍体制を脅かす可能性があるものを徹底的に排除しようとします。

（６）加藤家改易の表向きの理由

それが加藤家改易問題も左右したと考えられます。加藤家改易問題は、肥後藩第 2 代藩主加藤忠廣の嫡男光正が知り合いの旗本をからかう目的で、日光東照宮参拝に出かける将軍家光を、同行する老中土井利勝が亡きものにしようと計画しており、当日それに加勢する旨の連判状を作成し、旗本 2 名に届けたという事件が発端でした。連判状には、参加者の押印もなく、次に届ける者の指定もないなどおよそ連判状の体裁をなしていなかったことから、届けられた旗本から届け出を受けた老中松平信綱は、すぐさま出来の悪い悪戯と喝破します。しかし、内容が内容だけに内偵を続けます。届け出から 2 年後、南町奉行所で肥後藩の下級武士から訴えがあったという古い調書が発見され、事件は解明に向け動き出します。その調書には、「肥後藩江戸屋敷で藩主加藤忠廣の嫡男光正から、これから江戸城に打ち入るから準備をして来いと言われたので、怖くなり逃げ出して届け出た」旨のことが書かれていたのです。届け出た下級武士が少し痴呆気味であり、また藩の問題の訴えは奉行所ではなく評定所が管轄であることから、お蔵入りになっていたようです。しかし、これを見た松平信綱は、偽連判状事件との関連性を感じとり、連判状を届けた者の顔を知る旗本の家人に江戸の肥後藩邸を見張らせます。すると藩邸から、届けた者が出てきたため、光正の仕業と露見

します。
ここで幕府は、肥後に帰国していた藩主忠廣を江戸に呼び戻し、詮議しますが、忠廣は全く知らなかったものと判断します。しかし、忠廣は本件とは関係がないところで「諸事不作法」であったとされ、加藤家は改易処分となります。この「諸事不作法」の内容は明らかにされていませんが、忠廣の次のような行動を指していると思われます

1. 大御所秀忠から可愛がられていた忠廣（正室は秀忠の妹の娘琴姫）は、秀忠に招かれることが多く、将軍家光との関係は希薄だった。
2. その関係で忠廣は、家光よりも弟の忠長と仲が良かった。
3. 忠廣は、側室を溺愛し、徳川血筋の正室琴姫を遠ざけていた。
4. 秀忠が死去し、実質的な家光将軍体制になって直ぐ、忠廣は幕府に無断で妻子（側室とその子）を連れて熊本に帰国した。
5. 忠廣の江戸での評判が悪かった。
6. 熊本では 1619 年と 1625 年の 2 回、大きな地震に見舞われ、復興のため領民に重い年貢と夫役を課してきた。そのため領民の不満が高まっていた。

（7）「諸事不作法の」内容と考えられる行為と処分が不釣り合い
しかし、改易は死刑と同じであり、徳川幕府では、後継者が不在か、重要な法度違反があった場合にしか行われていません。家光将軍時代にも、外様大名 28 名が改易され、その領地 251 万石余が没収されていますが、このうち領主死亡・後継者なしによるもの（無嗣改易）が 16 名で大部分を占め、その他は、お家騒動によるもの 4 名、領主発狂によるもの 3 名、法度違反によるもの 3 名です。これを見れば、それほど強引な改易は行われていないことが分かります。加藤家のケースを上記の改易事案に照らし合わせてみると、実はどれにも当てはまらないのです。唯一近いとすれば 4 の法度違反とも考えられますが、当時参勤交代の制度は確立しておらず、慣習で妻子は江戸在住となっていただけです。それもその妻子とは正室とその子とされ、側室とその子は含まれていませんでした。たしかに藩主が国元に帰る場合は、幕府に届け出るのが一般的だったようですが、これを怠ったからといって改易処分は重すぎます。即ち、諸事不作法の内容と考えられる行為の 1 つ 1 つは、どれをとっても改易処分に値するものはないのです。そこで総合的にという意味で「諸事不作法」という理由を付けたのでしょう。
しかし、徳川御三家の 1 つ紀州藩主徳川頼宜の正室に加藤家から嫁いでいたこと、加藤家藩主忠廣の正室が前将軍秀忠の妹の娘（琴姫）であること、その琴姫と忠廣の間に生まれた光正は松平姓まで許されていたことを考えれば、普通なら忠廣は謹慎処分くらいに留めるところです。
（8）加藤家改易の狙いは頼宜抑え込み
それが改易処分に踏み込んだのには、処分にある政治的意図があったものと考えられます。それは、頼宜抑え込みです。家光将軍には、年が近い 3 人の叔父が御三家として控えていました。前将軍秀忠の年の離れた弟たちです。秀忠も家康死後頼宜を駿府藩から紀州藩に転封

させるなど弟たちが家光将軍を脅かさないよう手を打ってきました。秀忠生存中はこれで問題なかったのですが、秀忠亡き後を考えると、家光将軍の側近連中にとってこの 3 兄弟の存在は心配の種でした。このうち特に心配なのは頼宜でした。頼宜が家康から寵愛されていたことはよく知られていましたし、人物的にも剛毅な性格で、かつ本人も「将軍に何かあれば自分が」という野心を隠さなかったと言います。山岡荘八「徳川家光」では、3 兄弟を次のように表現しています。義直（尾張藩主）:「灰にくるんだ炭火/表面は静かながら、一掻きすれば中は真っ赤な火の塊」、頼宜:「灰の中も火ならば、表面も燃え立つ火」、頼房（水戸藩主）:「いったん火が付いてはどう消しようもない頑固無類の堅炭の火」。家光将軍体制安定を使命とする家光側近連中にとって、3 兄弟の影響力を削ぐことが重要な課題だったと思われます。特に頼宜の場合、紀州藩転封後、秀忠および家光将軍により改易され発生した諸藩の牢人を多数召し抱え、和歌山城を改修するなど武備を強化していました。特に捕鯨船 1000 漕余を有し、それらはいつでも巨大な水軍になることから、脅威でした。頼宜が浪人を多数召し抱えたのは、大坂の役に出陣した経験のある頼宜には、牢人問題の重要さが分かっていたからでした。大坂の役は、関ヶ原の戦いで多くの西軍大名が改易され、大量の牢人が発生したために大規模化したものでした。秀忠将軍および家光将軍になっても多くの改易が行われ、その結果牢人は 30 万人から 40 万人に達していました。事実この懸念は、1637 年に島原の乱という形で現れています。島原の乱は、キリスト教徒および農民の一揆と言われていますが、鎮圧に約 4 カ月も要している（大阪の役は冬約 1 カ月、夏約 2 週間）ことから分かるように、反乱軍の主体は幕府に不満を持つ牢人でした。一般には関ヶ原の戦いで西軍に参加し改易された小西の残党が主体と言われていますが、乱の 5 年前に改易された加藤家の肥後藩の牢人が主体であった可能性が高いと思われます。

しかしこれらの頼宜の動きは、家光側近連中にとっては、家光将軍体制への当て付けと映りました。頼宜が幕府に批判的な動きをすれば、頼宜の正室は清正次女八十姫であることから、肥後藩は頼宜の味方をすると考えておく必要があります。さらに八十姫の母（清浄院）は家康の生母於大に連なる譜代大名で福山藩主に出世した水野勝成の妹であり、清正死後八十姫は水野勝成の養女として頼宜に嫁ぎ、水野一族の水野重央が頼宜の付家老を務めていることから、頼宜-加藤家-水野家が固い絆で繋がっていることも危惧されました。加藤家を改易すれば、この絆を断ち切ることができ、頼宜を（水野勝成も）抑え込むことが出来ます。ひいては御三家の影響力を削ぐことになるのです

当初松平信綱が「出来の悪い悪戯」と喝破した出来事が発端となって、個別に見れば重大な法度違反はない肥後藩主忠廣（加藤家）を改易という重い処分にしたのには、このような政治的背景があったと考えると納得が行きます。

（9）将軍代替わりに当たりまたぞろ狙い撃ちされた頼宜

加藤家改易処分は、外様大名に対しては、54 万石という大藩で、徳川の親戚大名とも言える加藤藩さえ潰してしまうという家光将軍体制の強さ、怖さを示すとともに、幕府に批判的な行動が目立った徳川頼宜を抑え込むという 2 つの効果を狙ったものでした。その狙いは

成功し、家光将軍体制は一挙に強化されていきます。そして、盤石になったのは 1634 年の家光上洛でした。家光は、30 万 7 千人の兵を率い上洛します。そして、紫衣事件以来険悪となっていた朝廷との関係を修復します。また、家康が貯えた財宝を原資として、京・大坂・奈良の住人に 1 戸当たり 134 匁余の銀を配り、住民の心を掴みます。
同行しこれを見た頼宜は、家光を見直し、家光を支えることを決めたと言います。そしてこれ以降、頼宜は、家光側近連中から睨まれる原因となっていた牢人を雇うことを止めたと言います。その後の頼宜は、家光将軍の良き協力者であったようです。
ところが、1651 年、家光が 48 歳で死去し、その長子家綱が 12 歳で将軍に就任すると、またぞろ頼宜を巻き込む事件が起きるのです。それは、慶安の変と言われる事件です。江戸在住の軍学者由井正雪が改易で生じた牢人を教育・組織化し、将軍代替わりを利用して、幕府転覆を企てているとされ、仲間の 1 人の鑓道場主の丸橋忠弥が密告により捕縛、処刑されます。由井正雪は、それより 2 日前に江戸を脱出し、駿府で旅籠に宿泊しているところを包囲され、自害します。由井正雪の存在は幕府も承知しており、牢人が勝手に暴れるのを防ぐ存在として利用していたところがあります。一方では、警戒を要する対象として松平信綱の息がかかった牢人を門下生として送り込み、動向を監視していました。幕府側で牢人の増加を最も心配していたのが頼宜でした。紀州藩では、改易で行き場を失った牢人のうち優秀な者を召し抱え、加藤家改易の際にも職を失うこととなった加藤藩藩士を召し抱えました。このため、頼宜は当初由井正雪とも親交があったようですが、1634 年の家光上洛を境として、直接的関係はなくなっていました。しかし、慶安の変に際して奉行所が由井正雪の居宅を捜索したところ、頼宜の版が押してある書状が出てきます。そこで大老酒井忠勝以下の家光側近が頼宜を江戸城に呼び出し、場合によっては捕縛も辞さずの体制で、問い質します。この書状を見た頼宜は「私の版が押してあるなら安心だ。これが外様大名の版なら今頃大騒ぎとなっているところだ」（私がそんなことするわけないから偽物に決まっている。これが外様大名の物なら真偽の検証など大事件になる。）と言い、平然としていたと言います。この際、老中松平信綱、御側（将軍秘書兼目付）中根正盛らは、実力者頼宜を失脚に追い込もうとしたようです。これに対して頼宜の実弟である水戸藩主頼房や尾張藩主光友（前年義直死去により就任）と老中阿部忠秋が頼宜を擁護したと思われます。阿部忠秋は、清正の長女が嫁いだ大阪城代阿部正次家の分家筋で、頼宜とは親戚になります。松平信綱が文官系の切れ者であるのに対し、阿部忠秋は武官系の無骨な人格者でした。幕府の政策を諸藩に説くにあたり、松平信綱が理路整然と説明しても承諾しなかった大名が、阿部忠秋が来たら何も言わずに承諾したという話があるくらい、人望がありました。こうして松平信綱らの頼宜失脚の狙いは成就しませんでしたが、頼宜はその後 10 年間江戸に留め置かれましたので、影響力が削がれたことは間違いありません。
尚、慶安の変で捕縛された丸橋忠弥からは頼宜の名前は出ていませんし、由井正雪やその仲間 10 数名は自害しており、当然頼宜の名前は出てきていません。なのに由井正雪の自宅から頼宜の版がある書状が出てきたのは、不思議であり、謀略が疑われます。また、慶安の変

で処刑された者の多くは、由井正雪や丸橋忠弥、自害した10数名の事情を知らない家族や縁者であり、本当に幕府転覆を図るような企てがあったのか疑問があるところです。加藤家改易のときのように、将軍交替に当たり社会の引き締めを図るために、家光前将軍側近連中（そっくり家綱将軍に移行）の一部（松平信綱、中根正盛ら）がでっち上げた可能性があります。

このように将軍代替わりになると、頼宜は、新将軍体制に邪魔な存在として警戒されたことが分かります。

清正が八十姫と頼宜との婚約により、将来娘婿頼宜が将軍になることを夢見て「昭君之間」を造ったのも頷けます。

（10）結局、徳川幕府体制は天皇親政と変わらず

こう見てくると、家康が武力で天下を統一し、武家の棟梁として将軍に就任して開いた徳川幕府は、家康が長子相続制を敷いた結果、武家の棟梁たる資質を持たない将軍が誕生する事態が生じ、幕府の執政権は老中らの側近に委ねられ、天皇親政下の摂政、関白制度と変わらなくなっていたことが分かります。大御所秀忠死去後の家光将軍時代、および家光将軍死去後12歳で将軍に就任した家綱将軍時代もそうでした。特に家綱将軍時代など将軍はお飾りで、実質的には老中松平信綱が将軍職を代行していたようなものです。信綱は、ちょうど天皇幼少期の摂政に相当したと思われます。こうなると、将軍のためというよりは、側近自らの為に権力基盤造りが行われることになります。将軍側近は、小姓上りが多く、側近に上り詰めることによって譜代大名の地位に付きます。もし将軍位が子へ承継されなければ、側近は失脚する可能性が高いわけで、その場合、大名の地位も失う可能性があります。即ち、将軍の交替は、側近連中にとっては改易を覚悟しなければならない事態だったのです。これが分かると、家光将軍時代、家綱将軍時代に老中土井利勝や松平信綱らが謀略を尽くして頼宜抑え込みに全力を尽したことが理解できます。

（１1）頼宜の孫徳川吉宗の将軍就任は必然だった

頼宜は、1651年に慶安の変への関与の嫌疑をかけられ、老中松平信綱らによって10年間江戸に留め置かれました。正室八十姫が 1666 年江戸で亡くなると、頼宜はその遺骨と共に、和歌山に帰国します。そして、翌年の1667年に家督を側室の生んだ頼光に譲り引退し、1671年死去します（68歳）。頼宜は、16歳まで家康の元で育ち、14歳のときには家康の側で大坂の役も経験した結果、常に家康を意識し、追いかけ続けた人生だったように思えます。頼光のあと紀州藩主は、頼光の長男綱教（就任7年で死去）、三男頼職（よりもと。就任1年目に死去）を経て四男の吉宗となります。そして、この吉宗が家光の血統が途絶えた後の第8代将軍に就任するのです。家康が逸材と見込み、本人も将軍就任を望んだ頼宜の夢がここに実現したのです。それは、清正が「昭君之間」に込めた夢でもありました。

吉宗は将軍として入った江戸城で、当時幕府老中を務めていた武蔵忍藩主阿部正喬（まさたか）と出会います。なんとこの阿部正喬は吉宗の祖母に当たる八十姫の姉あま姫の血筋に繋がる者だったのです（あま姫の生んだ子供2名は、あま姫および夫正澄が若くして死去した

ため、加藤忠廣が亡くなる前年の 1652 年に分家筋にあたる老中阿部忠秋が養子として引き取り、このうち男子の正能（まさなお）に阿部忠秋家を継がせた。加藤家の血統維持も兼ねた措置だったと思われる。)。これを聞いた吉宗は、共通の外曾祖父にあたる清正に関心を持ちます。そこで吉宗は、細川藩に清正に関する記録の閲読、遺物の閲覧を依頼するのです。こうして、息子の代の不名誉な改易処分で歴史から消された加藤清正は、将軍家姻戚となって蘇ることになるのです。吉宗は、熊本城の「昭君之間」は清正が娘婿で吉宗の祖父である頼宜の将軍就任を夢見て造ったことに気付いたのはないでしょうか。このように見てくれば、一介の地方大名ながら神にまで上り詰めた清正の歴史の謎が解けてきます。